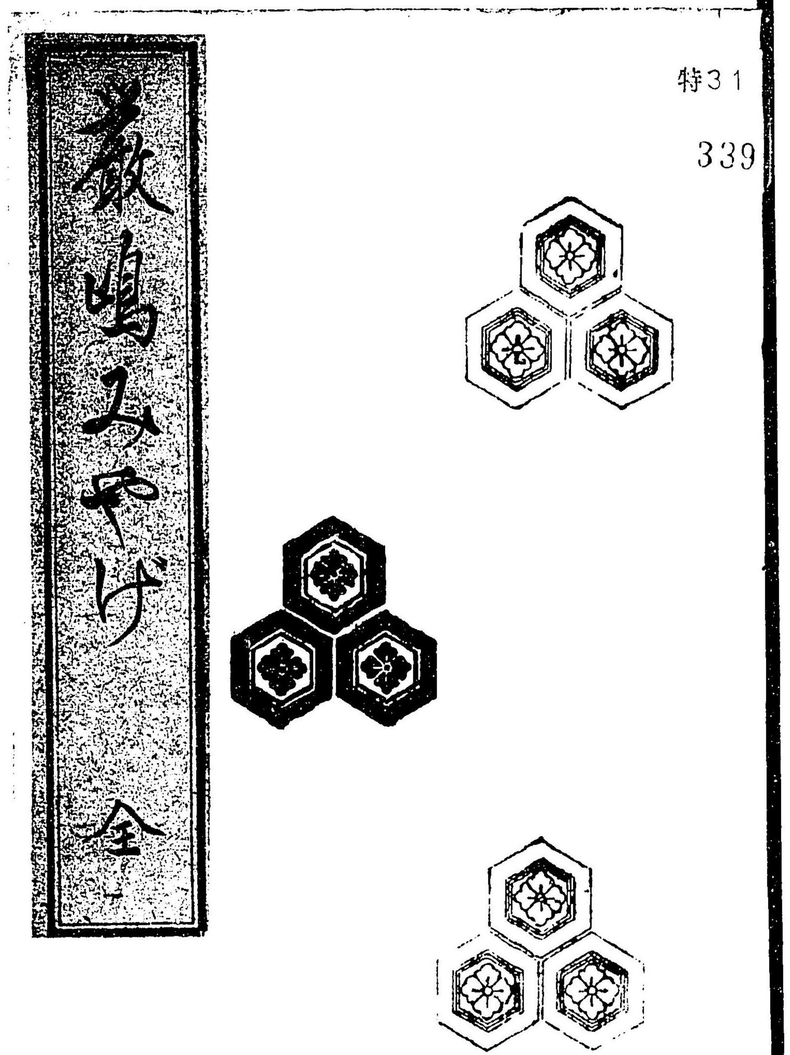


特31
339

025762-000-5

特31-339

嚴島土産

島村　武助／編

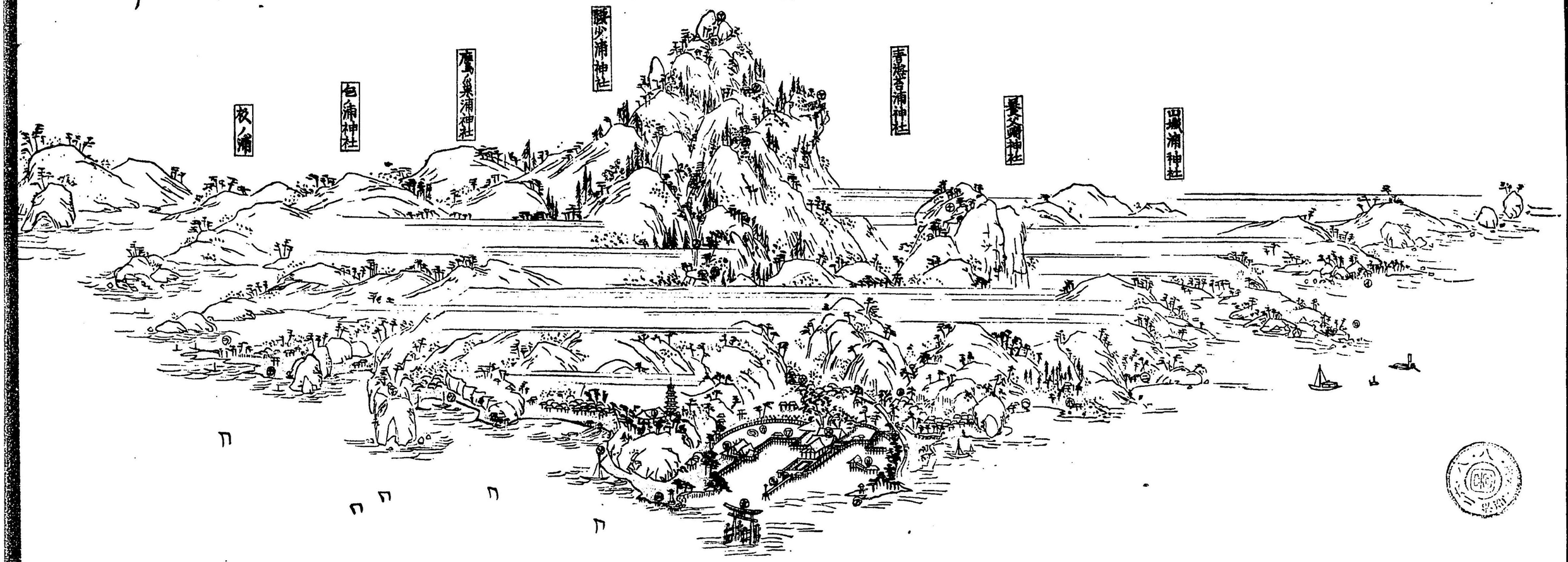
M26
ADC-3298

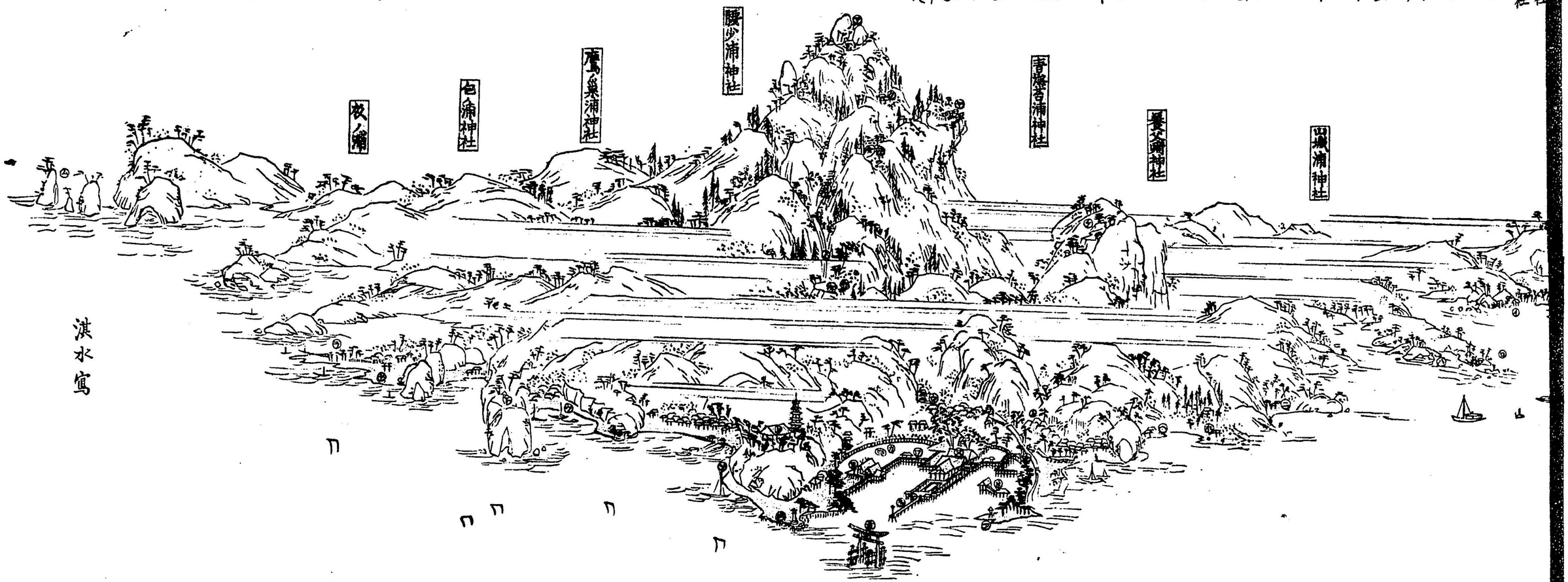
蔵鳴みやげ

海上巍然
神女廟
山間幽邃
梵王家
春晏滿島
二三月
處々香雲
皆是花

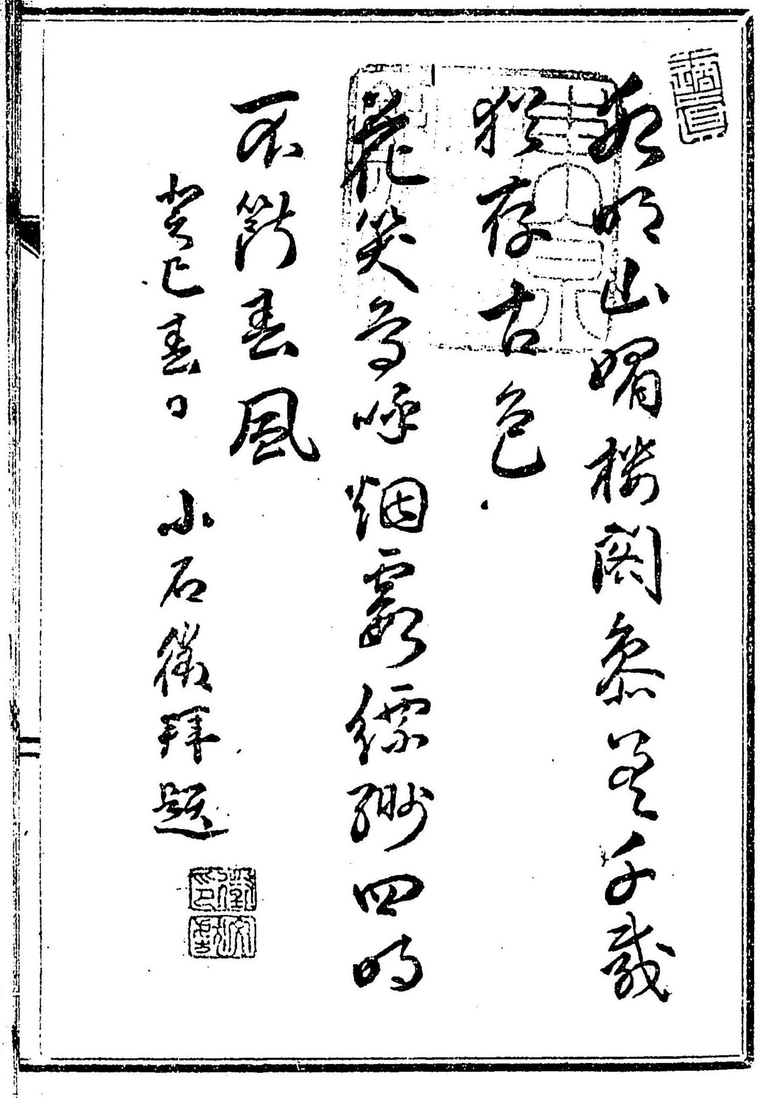
賴杏坪

イ 順屋浦神社
ロ 御床浦神社
ハ 内侍石
ニ 網ノ浦
ホ 大元神社
ヘ 石ふろ
ト 大願寺
チ 御幸松
リ 能舞臺
ヌ 御本社
ル 古さき
オ 大島井
ワ 朝登屋
カ 鏡ヵ池
ヨ 客人神社
タ 三かさねま
レ 千畳閣
ソ 右の浦
ツ 小うら
ネ 西行の一し
ナ 長すま
ラ 海水浴場
ム 聖寺
ウ もみぢ谷
井 滝の宮
ノ 白糸瀧
チ 中ノ堂
ク 永聞持堂
ヤ 御山神社
マ 便上
ケ 奥ノ院
フ 石
コ 新地ノ鼻




イ 順屋浦神社
ロ 御宋浦神社
ハ 内侍石
ニ 網ノ浦
ホ 大元神社
ヘ 石ふろ
ト 大願寺
チ 御幸松
リ 能舞臺
ヌ 御幸社
ル 古さき
オ 大島井
ワ 朝登屋
カ 鏡ヶ池
ヨ 客人神社
タ 三ヶさたま
レ 十畳間
ソ 右の浦
ツ 小うら
ネ 西行ゝし
ナ 長ちま
ラ 海水浴場
ム 聖嵩
ウ もみぢ谷
井 滝の宮
ノ 白糸瀧
チ 中ノ堂
ク 永南持堂
ヤ 御山神社
マ 頃上
ケ 奥ノ院
フ 新地ノ鼻
海上巍然
神女廟
山間幽邃
梵王家
春晝滿島
二三月
處ゝ香雪
皆是花
賴杏坪
腰少浦神社
鹿ノ巣浦神社
包浦神社
牧ノ浦
青煙浦神社
長久浦神社
山嶽浦神社
洪水寫

特31
339



序

登きあたりに參り面白き處に到ては親しき友をしのび歸たらんには、とありしかくありしなど、かたらむ事を、誰しの人も必まず思ふ事なり、されど山を越え海をわたりて日數へぬれば、忘ぬる事ども少からずして、急に思出んことかたき事になんありける、我が厳島は廻り七里ばかりの島なれど、宮居の高大なるはいふもさらにて、此處も彼處もみなもろよしある所々にしあれば、ひとたび參りたりとてなどかは委うすべき、然る故に元錄十年小島常也厳島道芝記七卷を撰むまれぞ當島の來由、祭式の次第、名所の故事等を纂しし者の榊輿にはあらける、其後天保七年岡田清筆とりて、厳島圖會十卷を編成す、此は給もまたゝくみにものしたれば、まの島に渡らぬ人すらこれを見ば、大宮の壯觀祭式の厳重、寶物の形狀名所の緣由なども、委うしらるべきものにしあれど、從者などをもつれず、ひとり杖をひきて參れる人々のさる容易からぬものを負持たらむ事、旅籠にあまりていと重かるべきことなり、されば島田にむねとある條々を摘み、また圖會のなりたる後神佛混淆引分の事あり、しかして國幣中社になりたまひたれば祭式の改りたるなどをあらはし、彼の圖會に洩たる

事どもをも拾ひあつめて小冊となす、故事などの委からぬを咎むる事なかれ、これはたゞ此神社に參りたる人々の三五日がはゞに本社よりはじめて摂末社さては名たゝる所々をも廻らむ道のしるべともなり且は家に歸てゝとありしかくありしなど、人にかたらむたよりとなん

立花のかをりくるあたりの委しき老人のかたるを聞てしるす而已

半僧堂主人

凡例

一此編は究めて簡約を要すされど現今所在の攝末社は小嗣といへども一字も漏す事なし然るに天保七年所編の嚴島圖會に見えて此編に載せざる神社往々あり其は明治四年改革の際最寄の神社へ合併になりたるものとしるべし

一寺院も現今所在のものは悉く擧ぐ是又彼圖會にありて此編になきもの多し皆廢寺に成りたるなり又地藏堂等の深き來由なきは省けり

一名所古跡等も悉く漏す事なしされども疑なる題もなく指せる由緒もあらざるは總て省けりまた故事は略言して其大概をしらしむ委くは彼圖會に引合せて見るべし

一古と今と景況の替りたる地名の改りたる等は其處々に附ていふべし總て現今の實景を著ていさゝかも飾言する事なし

一神社佛刹名所古跡等錯列せるは本社より始めて攝末社等順拜の便りに因りてしるしたるものとしるべし

以上

嚴島

嚴島は安芸國佐伯郡の海中に在て周廻七里北の方廣島を去ること五里餘の地は周防國玖珂郡玖野村最近くして一里に充す南はるかに周防伊豫の山々を見る東は能美江田等の諸島に對し山嶺巍々として松杉色深く人家櫛比せり西は宮島に當島は櫻樹數株ありて艶陽の花の白雪長久連なりて山の麓に鬱鬱す本社は戌亥の方に向ひて三津の海岸に臨む宮柱太敷立て潮滿時は大宮の床下まで浪をたゝへて遊べる魚も手に捕るばかりなり抑當社本殿に鎮りまします三柱の姫大神は掛巻もかしこき素戔嗚尊の御子におはしましけるが天照大御神の神勅のまゝに葦原の中津國に天降りましまして天孫の爲に祭れたまふ我が皇國の守護神たり（以上神代紀に取る）斯て當社に御鎭座ましましける事は人皇三十四代推古天皇の御代端正元年大歲癸丑（一書に端正五年とあり。然れども大歲癸丑とあるに依れば元年なるべし端正は年號にあらず天皇即位の年をいふといひつたふ）安藝國佐伯郡の住人佐伯鞍職と所の翁不二人同郡恩賀島に魚を釣てありしに紅の帆を揚て西の方より來れる船あり近づきて船中を窺へば舳前に厳鉢に赤幣立たる厳瓶を置て三柱の姫宮おはします厳瓶にむかひて宜まはく吾は古より此島を敷て幽事を治め

百王を鎮護す汝朝廷に奏て此島に造宮すべしと示現あり。即筑紫より神託の次第奏聞を遂げるに折柄都にてもまた神變ありけるにより奏す隨に社殿造營すべく勅命あり、筑紫より長りて當島に歸り、先づ大宮造るべき地を定んと新に船を造て舳前に五百津真賀樹五百津野蕪の八十玉串を珍の幣帛とりかけて當島の浦々を覓巡るに靈鷲山上より飛來て舳前に進む乃ちこれを道の神として海澄を漕回行くに覓に三笠濱に止るかくて佐伯所の二翁諸人をひきぬて三笠濱の大石小石を打ならし遠山近山の大峽小峽に立る樹を春斧以て伐採り高天原に千木高く新宮造礎て其歳の十一月辛酉朔壬申常世の神籠と覡ひ定て鎮奉る（以上當社鎮座記の巻を取る）また古傳に人皇十一代垂仁天皇の御代大神此島に御鎮座ありて（御山神社其跡なりといふ）推古天皇の御代佐伯鞍職に示現ありけるにより大宮造立ありしものなりといふかゝれば當島營は恩賀島といへりしを大神鎮座ましましけるにより神の御名を島の名におはせて市杵島とも伊都伎島とも稱へまた嚴島とも稱ふなるべし又宮島といへるも古くものに見えたれども今は公の御文にすべて嚴島と稱へられたり斯て創建の後度々朝廷より修理を加へさせられ祭式も重く行はせられける由いひ傳ふれども天文十五年

當社神主源廣就佐伯郡櫻尾の城主たりし時大内義隆に亡され舊記多く兵火に罹りて失ひたれば往古朝廷より御寄附等の證據とするべき文社藏ある事なし然れども延喜式神名帳に安藝國佐伯郡伊都伎島神社（大名神）とあり三代實錄に御階位の事二度まで見もれば當時御祭式等のおろそかならざりし事おしてしるべしかくて平相國清盛安藝守たりし時より渴仰の思ふかくさらに神領を增加し社殿經營功を盡し攝末社に至るまで殘る處なく修理ありければ世に比類稀なる壯觀とぞなれりける殊に承安四年後白河法皇御幸あらせられまた治承四年高倉上皇御幸の節に金銀の幣捧げたまひて御祭敬淺からざりし御事なり其後鎌倉の將軍家續て足利氏また本國の領守大内毛利福島淺野氏よりも時々厚願を籠られ神領寄附米許多ありて絶ず社殿に修理を加へ祭式怠る事なく行はれけり明治元年朝改一新の際改て勅願所に定めさせられ年々御撫物を給めたまひ同四年神佛混淆引分となりて別當供僧と廢止せられ尋て國幣中社に定めさせたまひ祭式等嚴重に改りけるは誠にありがたき例にこそ有けれ

○參拜順路

○本社本殿　祭神　三座

市杵島姫命　田心姫命　湍津姫命

相殿

國常立尊　天照皇大神　素盞嗚尊　外二三十三座

○本殿　梁間六間三尺六寸　桁行十三間二尺二寸

○拜殿　梁六間四尺四寸　桁行七間四尺四寸

○幣殿　梁三間一尺五寸　桁三間一尺八寸

○大床　巾五尺

○高舞臺　梁六間四尺八寸　桁十三間三尺八寸　堅三間四尺　横三間四尺

○平舞臺　平面百八十六坪

○火燒前　巾一間五尺三寸　長七間一尺三寸

○樂屋左右各二宇　梁二間五寸　桁五間五寸

俗に舌先といふ

○門客神社　二宇火燒前の左右にあり

祭神　櫛石窓命　豐石窓命

○廻廊　巾二間二尺　長百四十八間三尺　本社の左右に長く屈曲して一間毎に鐵燈籠を釣たり　汐滿ときは數多の燈火波に移りて光景たとへんにものなし

社頭明燈　八景の一

影うつる月の光も消たりけり波のはてらす宮のともし火　芳樹

涙の上もみなともし火の花咲て春をとこよのわたの大宮　種守

社頭賞月

百八廻廊圍海宇大潮浸月夜過午此時安得起龍玉

同見凌波素娥舞

○客神社　祭神　五座

天忍穂耳尊　天穂日命　天津彦根命　活津彦根命　熊野櫲日命

○本殿　梁五間二尺三寸　桁七間五尺五寸

○幣殿　梁二間三尺五寸　桁二間四尺七寸

○破殿　梁五間一尺四寸　桁五間三尺五寸

○大床　巾四尺六寸

○拜殿　梁四間一尺八寸　桁十三間二尺

○鏡ケ池　客神社の傍玉の御池の内にあり汐退きて後平沙に丸く窪みたる處ありて一小池をなせり秋夜月影この池にすめる景とあはれに消らかなり

鏡池秋月　八景の一

殿しまいつくはあれやくもりなきかゝみか池の秋の夜の月　正風

○朝座尾　梁一間一尺五寸　桁一間一尺五寸

○朝座の清水　朝座屋の傍なる御池の内より常に湧出て甚寒冽なり潮退きて後汲むことを得るなり又藥の水ともいふ

○神供所　朝座屋の内に設く目今假に本社拜殿の傍に搆ふ

○社務所　同　上

○掬水橋（巾一間五尺　長三間）　かたはらに平判官康頼硫黄ヶ島より流したる卒都婆の寄り付たりしといへる石あり　また康頼歸洛の後寄附の石燈籠一基建てりかたち甚だ古雅なるものなり

○大國神社　本社の左にあり

祭神　大國主命　相殿　保食神

○天神社　同　上

祭神　菅原大神　天云天社天神

○長橋（巾一間四尺八寸　長十八間）　○反橋（巾二間二尺　長十一間三尺）

○能舞臺　能興行の時は海面に棧敷を設く

○行宮跡　能舞臺のあたりをいふ高倉上皇御幸の時此所に御所を設けられたりといひつたふ

○玉御池　大鳥居より内潮の到れる涯（はし）をいふ○大神鏡座の昔此處に玉をうつみたりしによりてかく稱ふと云傳へり

○齋垣（總周百九十一間四尺）　玉の御池の岸上に繞（た）てり

○神馬　社頭の欄間にかゝけて大小すべて幾百枚なることをしらずされど玉石を攪まず人々よく稱呼するものをわづかに學ぐなは好事の人熟覽して筆意の淺深を味ふべし○左に記載する順次は筆蹟の甲乙によらず東廻廊より西廻廊に至る是は見ん人の便に隨ひてなり

○鶴　東洋○張飛　古秀○秀郷　素絢○三十六歌仙　書實座公畫

光信○神鶴　黒湖○狛鉾　丹倫○印譜　昇齋○孔雀　宋紫石○龍

杏雨○鐵馗　藍江○呉工女　應震○陵王　梅華齋○虎　專定○

白鹿　春水書○曹操　海僊○鯉

書○松　光孚○韓信　觀山○蝦夷人物　武四郎○鷄　應學○神馬

僊助蒔繪○草摺引　俊峰○本社ノ詩　丈山自筆○是蓬萊　敬幸書

○敦盛直實　丹覺○鹿馬　畫工不詳○鷹　同上○宗高　丹倫○樓

風　藍江○呂尙　直彦○波上日出　畫工不詳○羅生門　尙信○松

竹梅　眠山○繫馬　左近○三福神　常信○龍　伊川○寶船　畫工

不詳○神光照海　實美公書○田植　永叔○龍　愛信○松間日出

雅信○神馬　江阿彌○三十六歌仙　揚心○清正　元義○鯉　雪堤

○狂歌　貞佐○義家　有景○馬　畫工不詳○牛若辨慶　元信○草
招引木偶　作者不詳○仙人圍碁　岸眞○三十六歌仙　書常雅公畫
左光芳右光悌○耶馬溪　皆雲○鶏　松林○漁樵　二水○蝦蟇仙人
兆殿司○神功皇后　蠡山○福海壽山　蒙處書○日東第一勝　子
琴錢○山姥　蘆雪○花紅葉　光孚○花瓶　逸峯○大印譜　桐香○
紳女　畫工不詳○神廟記　士式○菊慈童　藍江○道灌　芳園○玄
德　楠亭○大哉　協書○外國樹江　常春○虎　東洋○猿鹿　祖仙
○大湖石　老山○神馬　荒雄○三十六歌仙　書龍山公畫工不詳○
俳諧ノ發句　苔虬撰○福祿壽　公長
○大鳥居　火焼前を距る事五十二丈八尺本社廣前の平沙に建り潮滿時
は參詣の船帆を揭けながら鳥居をくゞりて入來るものあり○古より
改造數度あり一が今建るものは明治七年十二月斧始ありて同八年七
月棟上の式ありしものなり
○柱　高七間二尺五寸　圍五間三尺三寸　○副柱　高四間四尺三寸　圍三間五寸
○棟　長十二間一尺七寸　上棟軒先迄一間六寸　○額庇　二間
左右距離　五間五尺八寸　○總高　八間三尺七寸

○額　壁額一間二尺三寸　○有栖川二品熾仁親王御染筆○昔の額は表小野
遣風裏空海の筆なりと云傳ふれど存在せるものなし元龜元年改造
の時大内義隆奏請ありし後奈良天皇宸筆の古額は今神庫に藏す
明治八年七月大鳥居の更に建けるときにのはべる
○松原　右は玉の御池左は御手洗川の流にそひて長くさし出たり松の
木間に石燈籠あまた立ならびて是又社頭の光景を添ふ
○大願寺　眞言宗なり明治四年改革の前の本社修理造營の事を掌どれ
り庭内に小松内府の植たまひしと云傳ふ老松あり一が今は枯て僅に
古跡を存せり○什物に古鐘・厨風・豐太閤陣中の厨筒、共他書幅等あり
○住吉神社　舊は大願寺の境内なり一が改革の際神地をわかつ
祭神　表筒男命　中筒男命　底筒男命
石風呂　石を疊み土を塗て室を造り松を燒き潮をそゝきて梅蘇を一
き病者を入らしむ此風呂弘法大師の所造にして功驗甚多しといふ
○大元觀　平原海に臨みて數株の櫻枝を接し花盛の頃は書かれる草の
上に紅の毬數て遊宴の興かぎりなくはるかに大野の山を望みて夕陽
を惜まぬ者なし

大元櫻花　八景の一

大元の花のさかりに成にけり神のおとめも袖やふるらむ　忠秋

ふなーくは櫻の限りーめはへて誘ふ風をよそにふせかむ　繁民

くろき羽を花にわり込むかからすかな　梅通

○大元神社　大元湖にあり○一月廿日百手の式を行ふ

祭神　國常立尊　大山祇命　保食神　○相殿　佐伯鋏

○鷄山、此邊時鳥を聞くに便よき處なり○因に云當島にては時鳥いとおはくおのかさつきの頃となれば山にても鳴き湖にても名のり讃かは待あかーてつれなーと恨る人のあるべき　石子

なれるまたむかーしのふか時鳥たちはな山の夕くれの聲　鎮操

いへいへに聞してゆくやはとゝきす

○經の尾　平清盛小石に法華經を書て納られー所なり

○宮穂谷秋夜草ひらにすたく虫の音いとあはれなり

淺ちふや月に玉しく露ふけてむしの音そよく夜半の秋風　履玄

むし鳴くやしつかにひゝく鐵のなみ　快々

○神殿　本社の神馬を飼ふ處なり

○多寶岡　多寶塔ある故にかく名付く此邊も花見によき處なり

○寶山神社

祭神　清正靈神

○愛染院　眞言宗にて大聖院の末派なり

○瀧本坊　同上

○清盛旅館跡　久保町にあり

○留守口惡比須神社　中西町にあり

祭神　佐伯鋏聽

○金刀比羅神社　同上

祭神　大物主命

○御手洗川　本社の後の流をいふ水源は紅葉谷の奥より出る

○筋違橋　御手洗川にわたせり

○寶庫　筋違橋の東にあり○寶物は卷末にあり

○花園　本社西廻廊の後をいふ櫻おはー

風雲島貴是烟霞咫尺江山萬里除獨與殿州緑不惡

五年両度去觀花　　虎山

○御幸松　後白河法皇御幸の時此處に松の木の御所と稱へ一行宮のありしといひつたふ

○御垣ヶ原　本社の後なり舊は本地堂ありけるによりて觀音の原といへりしを明治四年改革の際本地堂を取除きて今の名に改りたり此邊も櫻おほし

○三翁神社　同所にあり○九月廿三日舞樂を奏す

祭神　佐伯鞍職　所の翁　岩木翁

相殿　大巳貴命　狹田彦大神　平相國清盛公

○千畳閣　龜居山に建り豐太閤九州へ發向の時本社に參詣ありて大神の冥助を祈り翌年凱陣の折柄また船をよせて報賽ありし時此堂を造られしものなり○此處臨觀最宜し

○豐國神社　千畳閣の内にあり

祭神　豐太閤

○五層塔　應永十四年七月建立といへりされど頗主詳ならず

○荒胡子神社　龜居山の麓にあり

祭神　素盞嗚尊

○文庫　同所にあり本社の書籍を藏す

○湯立殿　同所にあり

○三笠濱　本社の邊すべて三笠の濱なれどもわきて廻廊の北口より龜居山のふもとの海邊をいふ○此處左は本社の殿宇建連り右は遠く海向ひの山々を望みて雪の景色甚だ清し

三笠濱暮雪　八景の一

誰もみな家路わすれてきてそ見る三笠の濱の雪の夕くれ　美靜

月のかけ花の光もおよはしとみかさの濱にふれるしら雪　少年龜太郎

○有ノ浦　諸國の船當島に來るものは大抵此浦に湊ふされば參客の送迎諸荷物の運輸等常に賑はしき處なり

有浦客船　八景の一

漕とむる船もあまたに有の浦のうち安けなる波の上かな　季知

ねきことのありの浦輪の友舟や花紅葉にもつたふ成らむ　春齡

○姪子神社　有の浦にあり

米齋木造之鹿

祭神　事代主命

○尼ノ州　壽永四年壇の浦にて入水ありし二位尼の尸此處に漂ひつきたりー所なりといひ傳ふ

○水天宮　濱の町にあり舊は神泉寺境内にありしが明治四年改革の際此處に移す

祭神　大綿津見神　安德天皇　二位尼

○存光寺　禪宗なり

○今伊勢神社　伊勢町の山上にあり

祭神　天照皇大神

○宮ノ尾　毛利元就陶全姜と合戰の時陣屋を設けられー處なり故に要害の邊ともいふ

○小浦　船子どもおはく住居する處なりいにーへはあびたる家のみなりしが今は樓など造りたるさへありて竈の烟もいと賑はへり

○姫子神社　小浦にあり

祭神　事代主命

○西行返　西行法師此處に來て島の女に道を問たりーにとみに應へもせざりしかば空蟬のもぬけのからにあと問へば山路をさへもをしへさりけりと詠たりーに女はよゝゑみてもぬけのからかとあそよむべけれ既にからにと定めたまひたれば答ふるにはよーなーといへりければ西行同なくて此所より空しく歸りしと云ひ傳ふ

○長濱　一名八重濱ともいふ此邊も櫻おはく眺望いと面白きところなり

また此濱に水海浴場の設けあり○本島は總て海濱に細砂をしきて波動の强弱よく度に適ひ殊に島内遊歩の地も亦多く實に適應の場處なりといへり因に云鳥居ノ前、大元浦、網の浦、等にても浴す人あり何れも潮瀨緩急を量りて已が病に適度の地を撰むものなり

碧海廻山樹色新四時風景獨絶倫遊人此地眞多事

七處胡神七里濱

○長濱神社　長はまにあり

祭神　興津彦神　興津姫神　○相殿　所ノ翁

○二王門跡　長濱より本町に越ゆる道なり此邊も櫻多ー

世外

○新町　いにしへは最眼はへる遊廓にて全盛の太夫もあまた在りがいつの頃よりか管絃の音淋しく打掛の錦うらさびて踏ならす高足駄の音はさゝかけ傘の柄と共に長く絶果たり實にきのふの淵はけふの瀬と替る流の身の定めなきに此處もまた遊女の故郷となりたり

○德壽菴　存光寺の隠室なり堂内に金石の地藏菩薩を安置す

○瀧の尾　山上にさゝやかなる瀧あり此處舊釋迦の大像を安置せる堂ありしを故に大佛の原といへりしを近年改て今の名になりたり○此邊も櫻かはき故に櫻が茶屋などいへる樓あり又雪の眺望も甚よしとす

○梅林　梅は近年植たるものなれども地味相應なりたるにや年々に繁茂し花の頃は山風遠く薫りて衆人の袖に餘るされば文客かならずたづぬへき處なり

眼にあたる木はみなうめの月夜かな　鏡史

○福壽坊　眞言宗なり近來大佛を安置す

○北之神社　舊は北之藥師といへりしが改革の際神社に改まれり

祭神　狼田彦大神

○寶壽院　眞言宗なり本尊阿彌陀如來は往古當島網ノ浦の海中より顯れて靈驗多しといへりまた堂内に聖太閤の納めたまひし藥師如來を安置す

○鳥居松　岡の上に松二樹並び立るさまの鳥居に似たるに依て名つく此邊も櫻かはく眺望よき處なれば麗たなびく春の頃は遊客宴を開きていと賑はしきところなり

○本町　北ノ町中ノ町幸町等の名ありて商家軒を連ねたり中にも名物の色楊枝杓子木盃等をひさぐ店數多あり

○幸神社　幸町にあり○此邊を金鳥居ともいへり足利氏銅の鳥居を建んとして其功を竣ざりし處なりといひ傳ふ

祭神　狼田彦大神

○塔の岡　本町より本社に參る要路にして五層塔ある龜居山についけるが故に此名あり

○學校　本島内の小童すべて此門に入る

○光明院　淨土宗なり天文の頃住職以八上人は不凡の大德なりしを傳稱す

○谷ヶ原　茫々たる平原楓谷の山上につゞけり麋鹿常に群をなして淺

芽色つく秋のころ妻とふ醉のあはれなるは風流士のはらわたにしむなるべし

谷ヶ原鹿　八景の一　千廣

やつかはらむつれて遊ふ鹿見れはとゝに樂む神の御園か

因に云ふ鹿の名所を谷ヶ原としゝ定めたるは然るとながらまた神垣に眠りあるひは市中に遊びて讓路を劃るゝなど皆憎からぬさまなり

抑鹿は大神の畜と稱して往古より之を殺る事を禁じ代々領主の保護嚴しく若し誤つて害する者あれば即罪に行はる故に其數年々繁殖すつらつら考ふるに鹿は神代に大廟廻の占業に用ゐられまた廻久神といへるゝ鹿のことなりといへる説ありて幽冥にしたしく仕奉る獸なり瑞應圖に云鹿者純善之獸ナリ王孝則白鹿見ハルとゝ見えて角あれどゝ常に怒れる色なく其性の狡猾ならざるを神ゝ愛ゝたまふなるべし

○神力寺　具言宗なり○舊此地に寶泉院といへる寺ありしが廢寺となりける故當寺を瀧の尾より移したるなり

○秋葉神社　南町にあり

祭神　火産靈神

○紅葉谷　渓水清くして巖石奇なりかく渡す橋のさま最趣深く両岸に櫻の大木ありて花の頃は黨れる白雲樓の軒にたなびくあるひは時鳥を聞き暑を避るにたよりよく紅葉は元より谷の名におひて見るかぎり染つくし又雪の日は玉子酒の樂み自在にて雅となく俗となく四時に容のたゆる事なし

秋日遊楓谷　拙白

丹楓蔭水々奔流臨水家々起小樓想得絃歌人散後數聲鹿鳴滿山秋

谷の紅葉染つくしたり

ときゝて

日をへなは鹿の蹄に羅るへしとく行て見ん谷のもみち葉　菊舍

紅葉谷ノ図

○四之宮　紅葉谷にあり○此邊秋夜虫聲いとかなし

祭神　不詳

○瀧町　筑遠橋を渡りて御山に登る道なり○以下御山神社へ參詣の順次にしるす

○大聖院　眞言宗なり當院は代々本社の別當職にて座主と稱したりし

が明治四年改革の際社役をはなる創立は大同元年なれども天文の頃ひに舊記を失ひたれば委しき事はしるよしなし然れども治承の御幸に當院の住職を阿闍梨になされまた天正年中に仁助法親王御止住の事見えたりされば昔時寺格の輕からざりし事思ひやるべし祈禱堂に豐太閤の守本尊たりし等身不動明王を安置す○什物の內聖德太子の像は巨勢金岡の畫きたるに後京極攝政良經公の讚ありて珍らしき者也此外弘法大師の眞筆等あれども略す又豐太閤當院の書院にて和歌の會を催したまひたりし時の歌三十六首を一軸にして是又秘藏せり

○多聞坊　眞言宗にて彌山本願と稱せし寺なり

○西方院　眞言宗なり○當院の庭は雪滑の造りたるものなりといひつたふ

○一の鳥居　御山登路の麓にあり

○祈不動堂　本尊不動明王は豐太閤の護身佛なりといふ

○瀧宮　一の鳥居より一丁余

祭神　瀧津姫命

○白糸瀧　瀧宮の山上より落て水勢甚だはげしく實に白糸を乱せるが如くいかなる旱にも渇るゝ事なしまた此邊螢おほく瀧のしら玉に散みだるるけしきいとすゞし

瀧宮水螢　八景の一

雲井より落くる瀧の宮のへに星とまがれて飛はたるかな　忠綱

○御幸石　治承四年高倉上皇この石上より白糸瀧叡覽ありしといふ

○中の堂　一の鳥居より七丁余此處迄登路甚だ險阻なるか故に參詣の人おほく此堂に憩ふ○名物ちから餅をひさぐ

○幕岩　數百丈の巖壁さながら幕を張りたるが如し

○力石　俚傳に云福島左衛門太夫正則登山の時此石の邊にて怪異の事ありしにより直に下山ありけるよし故に太夫戻の石ともいふなり

○二の鳥居　一の鳥居より十五丁

○二王門　古は未だより後此門を限りて山登を許さゝりしが明治四年改革ありてより此禁なし

○水晶石　表は常の石に異ならず中央の穴より窺へば數丈の石中悉く水晶なりといふ

○御山神社　一の鳥居より十八丁

祭神　市杵島姫命　田心姫命　湍津姫命

當社は大神當島へ御鎮座のはじめ影向ありし御舊跡なるが故に三柱の姫神を鎮めまつりしにいつの頃よりか三鬼神を合せまつりて大鄙の御名は稱ふる者もなく隱れたまひたりしを明治四年舊に復して斯く祭る事となりたりまた大神鎮座の山なれば御山と稱へしを佛家の徒山勢の不凡なるを須彌山に比して彌山と改めしがこれも舊に復せられたり

○神鶏　形細くして凡鶏に異なり始祖は大神當島に御鎮座の時したがひ來れる由社傳あり毎年雌雄一雙を產し陰暦九月廿八日同郡海向ひ大野村大頭神社に於て四鳥の別をなし親鳥の行方をしらず然るに慶應二年大野村取場となりて一年別鶏の式を怠りしより爾來雌雄二雙と成れりされど二雙の外は更に增殖する事無し

御山神鶏　八景の一

世と共に勤て神に仕ふるをあさからすとや見そなはす覽　重遠

○求聞持堂　本尊虛空藏菩薩は弘法大師の作なり此堂は大師求聞持修法滿座の靈場にして修法の行者千有餘年の今日に至るまで一座も絶る事なしされば圍爐に焚く火は大師開持より傳はれりといふ○堂內に大師の手蹟其外什物あり

○閼伽井　大師修法の加持水にして甚だ清冽なり

○愛陀羅石　盤面に梵字また其字を鐫りたり大師の作なりといふ

○時雨櫻　花しげくして露深し山風にわひ散かゝる露さながらしぐれに似たり

○玉取岩　石面に玉を取りたりといへる痕あり

○鐘撞堂　治承元年右大將平宗盛寄附洪鐘を釣りたり

○毘沙門堂　堂中に武林士式の寫彌山佳景と題せる額あり子式は孟子の裔にて義士唯七の祖父なり

○頂上石　當山の絶頂にあり

○龍燈杉　數百歳を經たる老杉なり近年大かた枯行きてたふれたるま
ま僅に枝葉の青きを存せり○此處は龍燈を臨觀するに便よければ龍
燈の上る夜は遠近の男女この杉のもとに群集す故にかく名付たり龍
燈とは舊來正月元日同六日の夜等當島液々の海面より現はるゝ火を
いふ火色常の燈火に異ならず山上より臨めば漁火の如しといへども
間近く見れば尺餘の一團火波を照して海底より浮び出る形勢甚だす
さまじといへり

○船石　形船に似たり

○大日堂　大同元年弘法大師の建立なり○堂内に木造の燈籠あり甚だ
古代なるものなり

○奥ノ院　大師堂彌勒堂等あり

○龍ヶ馬場　巖上に馬蹄の跡あるが故に駒ヶ林といふといへり或は云
馬蹄の跡といへるは弘中隆包毛利元就と戰ひし時陣とりたる幕串の
跡なりまた駒ヶ林は駒返しの誤りなりともいへり

○三劔ノ窟　往古劔を收めし處なりといふ

○龜ヶ窟　むかし龍の出しといへる巖穴あり深さ量るべからず

○護摩谷　盤石覆ひかゝりておのづから一室をなせり弘法大師護摩修
法ありし處なるにより内に大師の像を安置す○これより二王門に出
で元の道に歸るまた谷路つたひ跨磵渓に出る道もあり

○巡島式　此式は大神鎮座のはじめ大宮處を定んとて佐伯鞍職所の翁
等神島の先導にしたがひて浦々を巡りたまひし例にならひて七浦の
神社に拜し鳥啄の式を行ふなり其式は願主吉辰を撰みて島廻りの事
を社務所に依頼し神官の承諾を聞き本日未明より各鐵砲して船に乘
る此時神官の船には四手切かけ榊をし立乱聲を奏して先に進む續て
願主の船も山を右になして漕出す明はのゝけしき身にしみて蓬萊巖
の鼻を出れば東の方波路はるけき山の端よりはひ出る朝日影の海
原に輝くなどおろかなる言葉には盡しがたしかくて七浦の神社を巡
り本社に歸りて神樂を奏すを例とす○以下島巡りの順次にしるす

○聖崎　當島北の鼻なり是より東を島の裏とす

○蓬萊巖　形畫かける蓬萊山といふものに似たり

○海氣　清明の後殊に長閑なる日蓬萊巖の沖なる海上へ一面の金氣發
して中に宮殿樓閣樹木等のかたちあらはれ暫くありてかつがつ消散

し所謂蜃氣樓のたくひにしていまだ其理を究めたるをきかず土人はこれをも蓬萊といへり○古說には此邊の海底すべて金砂なるが故に其氣の發するものなりといふ近來は海草の氣の蒸發するに社頭の景色の反射せるものなりといふ

○杉ノ浦神社　島巡第一の拜所なり

祭神　底津少童命

島めぐりの時此浦に船を寄せて神社に參り神官祝詞述りて笛を奏し願主はじめ各拜す（以下七浦の拜式いづれも同之）拜をはりて朝餉の式ありはなはだ古風を存す

○金岡水　杉ノ浦の奥二丁にあり○此邊平洲に金砂おはく交れりさるゆゑにや水寒冷にして且甘味あり

○包ノ浦神社　七浦の外なり島巡の時船より拜す

祭神　鹽土翁

○腐巢浦神社　島巡第二の拜所なり○此浦に腐の爪貝といへるあり

祭神　底筒男命

○櫻少浦神社　島巡第三の拜所なり

祭神　中津少童命

○鯖崎　比目魚に似たる石あり故ゑ名づく

○青海苔浦神社　島巡第四の拜所なり○島巡の時午飯の式あり

祭神　中筒男命

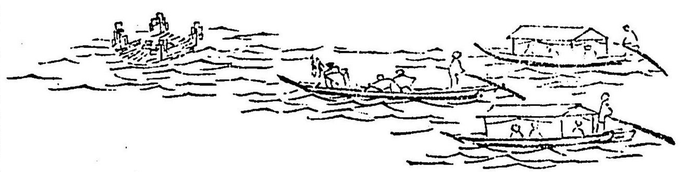
○陶全姜敗死跡　青海苔浦の奥十丁余高安ケ原といへる地なり全姜は大内義隆の臣なり主家を亡して勢ひ近國におよばんとせしを毛利元就のために滅せらる

○食父崎神社　七浦の外なり

祭神　鹽椎

此處は潮もなく淵もなし故に島巡の時船中より拜すかくて神官海中に榮を浮べ榮を奏すれば鹽鳥忽ち山上より翔來りて波に浮べる榮を啄へて御山にはこぶ是を鳥啄式といふ○此式を行ふ事願主の望による事なれば

鳴廻ノ図



定まれる日なー故に久ーく行はざる時あり又一日に五組十組かさねてこれを行ふといへども鷺鳥の行ひかはる事なく万一あやまちて船中に穢あれば鷺鳥楽を運ぶことなしといふ

輕波一棹雲春洞七浦風光逐次移笛裏神鴉飛欲下
舟人搖櫓自迴々

○山白濱神社　島巡第五の拜所なり

祭神　表津少童命

○革龍崎　當島南の鼻なり是より西を島の表とす○此地に早咲の櫻一樹ありて雨水の頃より蕾を破る

○須屋浦神社　島巡第六の拜所なり○島巡の時餅の饗あり

祭神　表筒男命

○磯の清水　磯際にありて潮退きたる後一小池をなし湧出る水甚清列なる故に往來の舟人これを汲で須屋の清水と賞既す

○御床浦神社　島巡第七の拜所なり○神前に大なる巖ありて龜甲の文をなせり

祭神　市杵島姫命

○内侍石　大江の浦にあり治承年中德大寺實定卿本社に參詣ありて歸洛の節島人有子内侍あかぬ別を惜み此浦まて送り來りて悲歎の涙にくれー處なり○かくて後内侍此島をあくがれ出て津の國住吉の沖にて身を沈め果敢なくなりたりとぞ

○鞆蹈潟　平宗盛寄附の鐘を鑄さしめられたる處なるによりて名づく春の頃貝拾ひに便りよければ少女どもの打むれて遊びあるく處なり

○網の浦　此邊も櫻おはし○大元浦へ越んとする處を或人花の洞といへりしが實に其名空ーからずといふべー

○寶物　寶庫に納まれり拜見せんと望む人は社務所にねがふべー

○高倉天皇之御扇　一本

○安德天皇之御既具　六品

御衣　石帶　笏　飾劍　箙　檜扇　何れもいとちいさー

○宸翰　二拾五枚　○親王御染筆　二枚　○葦手書檜扇　一本

○假面　九面

拔頭　迦城樂　陵王　納曾利　散手　貴德　採桑老　二ノ舞　同臘面　以上承安の頃朝廷より御附寄のものなり中にも拔頭の面は享和

二年天覽に備へし時古物殊勝の品に思召れ大切に致すべく旨敕諭を賜ふ

○奚婁　壹振

假面同時の御寄附なりと言ひ傳ふ

○觀　一挺　同上　○笙　五管

第一小櫻第二春風第三小男鹿第四國家丸第五獅子と稱す中にも小櫻は高倉天皇御愛翫の器なりしを治承四年御幸の時御奉納ありしものなり

○築鞠　一管　○笛　三管

第一は駐腦にて造り第二は銅第三は異なるものにあらず中にも駐腦の笛は豊太閤征韓の時彼國より拳りしを毛利家に賜ひ同家より本社に寄附ありし者なり

○高麗笛　一管　○和琴　二張

法華と銘あり○律板柱とも添ふ

○琴　壹張　○箏　一張

表裏とも斷紋あり○平重衡愛翫の器にて唐の雷家の作なりと傳稱す

○琵琶　五面

第一谷川第二瀧涙第三磯涙第四落月第五無銘なり中にも第一谷川は玄上を摸して作りし者なりと傳稱し最も殊勝なるものなりまた第五は九條道房公愛翫の器なりと傳稱す

○太鼓　五挺○羯鼓　三挺○二ノ鼓　壹挺○三ノ鼓　壹挺

○笹檜判木　壹枚○小忌衣　壹領○法華經　高倉天皇宸筆　八卷

○壽量品　同上　壹卷○藥命經　同上　壹卷○經卷　壹函

法華經二十八卷無量義經觀普賢經阿彌陀經心經願文各一卷都て卅三卷平相國清盛公の寄附にして願文は公の自筆にて餘は一族三十二人各壹卷を分ちて書寫あり一も のなり其飾裝の結構盡善盡美實に當時平家の隆盛見るに足れり

○法華經　八卷　一卷闕

平清盛同賴盛の両筆なり

○理趣經　「弘法」大師筆　壹卷

○般若心經　同上　壹卷

○細字法華經　同　上　八卷

外函竪三寸横二寸深壹寸七歩字形の小さき事おしてしるべし

○寧殿經　作者不知　五十五卷
反古の裏に寫して殊勝なるものなり○反古經とも云ふ
○袈裟　弘法大師隨身品　壹　肩　○鈴杵臺盤　同　上　壹具
○五鈷三鈷獨鈷　同上　各壹握　○赤栴檀佛像　毘首羯磨作　壹龕
○古文書　二百十八卷
神領　制令　祭祀　營繕　寄進　雜訴　等各部分なしたり
○桑花物語　松木內大臣宗條公筆　全部○奉納和歌　藤原經尹卿筆　壹卷
○和漢朗詠集　冷泉爲成卿筆　壹卷○本島八景畫詩歌　諸名家筆　三卷
○百人一首　外山光和卿筆　壹冊○香記　壹卷
○掛物　廿六幅
巨勢金岡東福寺兆殿司狩野探幽等の筆あり
○硯　二面○墨　壹挺○文臺硯箱其　壹脚○太刀　五十四口
螺鈿　兵庫鎖　殿物作　裝束帶　錦包藤卷　衛府　斷髮切　綱切
稻光　彦左近　等と銘せるものありて作は　信國　天國　友成　貞
秀　一文字　久國　助次助家兩作　國俊國行兩作　菊一文字　兼光
等を以て稱譽す

○劍　三口　○刀　四十七口
乱髮と銘せるものあり作は　正廣　則國　西連　左文字　保昌五
郎　地藏信國　助國　等を以て稱譽す
○短刀　卅三口
天國　神息　友成　波平　行平　國光　正宗　國行　國俊　志津三
郎兼氏　國光　兼光　村正　定圓　等の作あり
○薙刀　五振
貞宗　宗貞　等の作あり
○鎗　八本
信國　金道等の作あり
上に擧げたるは人々のよく稱讃するものを拔出たるにて此外なほ名
作數多あればなほ悉く熟覽して燒刃句等の眞味を知るべし
○弓　九張　○矢　十五筋　○甲冑　十三副
源義家同義光平重盛大內義隆等の着用ありしもの各一副また小櫻縅
一副あり殊に古の名作なりと傳稱す又近來淺野家より寄附あり一物
は兜面鎧胴鎧膝鎧籠手脛當大袖等いづれも名作なる中に兜は宗磨の

作にて世に此類なき由折紙に見ゆたり

○古鏡　二面○曲玉　十二顆○七寶杯　壹箇○青磁塔　壹包○沈ノ椿　長五尺三寸余　壹本

○蘭奢侍香　壹包○赤梅檀　壹箇○黄楊駒　春日作と傳稱す　壹頭

○沈枕　壹箇○青磁枕　壹箇○木馬　辨慶の甑物と傳稱す　壹頭○欽器　壹具

○銀獅子　壹頭○古銅印　二顆○古錢　三百八十九枚

豐太閤征韓の時納めたまひし寶錢なり

○年中定祭日幷行事式

官　祭

○月並祭　一月一日二月以下同之御饌捲垂神饌進撤祝詞奏上神官拜禮等の次第は祈年祭の條に委くしるす餘は准らへて一るべし

○日供　祭日の外日々獻ぜ

○元始祭　同月三日

○孝明天皇祭　同月三十日○御垣の原に遙拜所を設く

○祈年祭　月日不定○二月四日式部寮に於て班幣あり地方廟へ到着の上吉日を卜して祭日を定む其式は地方長官以下祭に關る官員及び神官共に前日より齋戒す當日早旦神官神殿を裝飾し午前第八時神官地方官一同幄舍に着く次に御幣物を幄舍の前に入置く次に宮司社殿に昇りて御簾を捲き擧て例に倣す此間奏樂次に禰宜以下神饌を傳供す此間も奏樂次に屬御幣物を辛櫃より出し假に案上に置く次に宮司御幣物を神前の案上に奉り座に着て祝詞を奏す次に地方長官玉串を擧り拜禮擧て幄舍に復す次に屬以下拜禮次に宮司玉串を擧り拜禮次に禰宜以下拜禮次に御幣物及神饌を撤す此間奏樂次に宮司御簾を垂る擧て下殿神官一同幄舍に復す此間も奏樂次に退出す○神饌八盃　和稻荒稻　酒二瓶　海魚　川魚　海菜　野菜　菓　鹽水　以上

○紀元節　二月十一日○遙拜所同上

○神武天皇祭　四月三日○同上

○例祭　六月十七日○祭式新年祭に同くして地方次官同屬官等參拜あり

○大祓　同月三十日

○神嘗祭　九月十七日○遙拜所同上

新嘗祭　十一月廿三日○祭式祈年祭に同じ

○大祓　十二月廿一日
○除夜祭　同月同日

私祭

○神衣祭　一月一日○午前第一時神官一同幄舍に着き齋宜神衣を內陣に奉る○神衣は白綾に龜甲の紋を織出したるものなり前年後殿に注繩引廻し吸工祓してこれを開り社頭に収む神官これを數疏て本日此式あり

○新年祭　同月同日○舞樂あり振鉾

因に云當島に家居せる者は毎朝小桶を持て神前の潮を汲歸り尾內を清むる事一日もおこたる事なし殊に一月一日は未明より戸ゝきはひ出て神前に玉り潮を汲み家をそゝき身を清めて本社に參詣するを例とす是を若潮廻へといふ

○同二ノ祭　同月二日○舞樂に萬歲樂延喜樂あり

○同三ノ祭　同月三日○舞樂に太平樂狛鉾蘭德樂陵王納曾利あり本日の太平樂は治承年中左大將德大寺實定卿本社の殿前にて奏たまひしを例として世々神官野阪家にて勸め來れり○因に云當社の舞樂は最上古より傳はりていにしへの盛なりしことは神庫に収まれる樂器を見てもしるべしまた拔頭獻香選城樂等の秘曲もみな舊神官の家々に傳はりて今に存せり○舞樂奉納せんと願ふ人あれば臨時にも行ふ事あり

○揚枝獻上祭　同月四日○揚枝は當島產物の第一なり故に獻す

○斧始式　同月同日

○地久祭　同月五日○舞樂に振鉾甘洲林鐘拔頭選城樂あり○本日は未明より行ひて朝日影御山の嶺よりにはひ出て舞人の面を照すを例とせり故に日の出祭ともいふ

○月並舞樂溫習　同月十五日（二月以下準之）また臨時にも行ふ

○月並祭　同月十七日（二月以下準之）天神社の拜殿にて行ひ兼題の短冊を神前に掲ぐ

○月並和歌會　同月廿五日（二月以下準之）

○敎會講中安全祭　三月十七日○講中の輩は館殿にて拜禮を許す

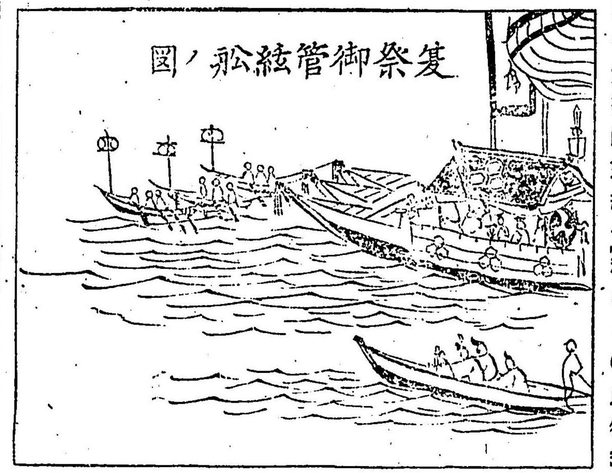
○同鹽神祭　同月同日

○推古天皇祭　四月十八日○舞樂に萬歲樂延喜樂陵王納曾利あり

○桃花祭　以桃花盛定日○舊は三月十五日を定日とせり○舞樂に振鉾一曲香利古桃李花（舞ナし）萬歲樂廻喜樂散手貴德陵王納曾利あり○此祭式は薄暮よりはじまりて音樂中桃花を本殿に獻ず

○放會島巡　五月十五日

○管絃祭　陰曆六月十七日相當日○此祭式は御船三艘を組で屋形を造り神輿を乘せ奉りて神官左右に列ず水主は素袍袴にて烏帽子を冠り各棹を取るまた引船三艘蝶蛯の如く艤をおゝ並べて先に立ち大鳥居の前より直に地御前神社（海向ひ一里余）の廣前に渡り神事ありて管絃を奏すそれより本島に歸り長濱神社大元神社等の前にても管絃ありて御船を大鳥居より本社火燒崎に漕入れ祭



式最嚴重なり次に客神社の御前に至り管絃等前の如くかくて御船を升形（玉の池の内）の御に入れ三回めぐらして本殿に還幸なし奉るを例とせり○此祭式を拜んと諸國より集ひ來れる船舶艦相接して海原を狹しとす此夜各船の帆柱屋形等又戸々の屋上に掲げて獻る神燈幾數萬なることを知らずさらぬだに月明らけき夜燈火の影廣き海面を照らし管絃の音心耳を澄して誰かは渴仰の思ひ淺かるべき實に海面の大祭此觀また類ひなかるべし○此祭式は薄暮汐のさし來る頃より始めて子刻ばかり汐の退く頃終るを舊來の式とす故になほ陰曆六月十七日相當日を以て行ふなり昔は神官供僧左右に列座して神官管絃を奏し供僧伽陀を修したりしが明治四年改めて上文の如くなりたり

○因に云此祭式に神船の供奉どして廣島の町々より御供船と稱し猛々緋に金銀の糸もて種々の繪を縫たる幕を走らし幟吹貫を押立今樣の音曲を囃しつゝ祭禮の前夜廣島の川口を出て本日の祭式に闕（あつ）り翌日廣島に歸る還近の男女これをも見んとて群集なす事またおびたゝし

○放會講社安全祭　九月十七日○講中の非禮式三月に同じ

○同廳神祭　同月同日

○菊花祭　以菊花盛定日○舞樂に振鉾一曲管利古賀殿舞し萬歳樂延喜樂散手貴德陵王納曾利等あり○式は桃花祭におなじく管樂中菊花を本殿に獻ず

○放會巡島　十月十五日

○天長節祭　十一月三日○舞樂に萬歳樂延喜樂陵王納曾利等あり

○神衣裁縫　十二月廿六日より廿九日に至る

○御樂拂式　同月卅一日

○鎮火祭　同月同日○午後第六時松明の式あり

○產物　當島に產して人のよく賞譽するものを擧ぐ

○色楊枝　かたち種々に削りなして五色に染わけたる最も美しきものなり

○杓子　大小種々あるいにしへ島人清心といへる者創り初たる故に清心杓子といひて用ゐるに甚だ便りよし

○木匙　近來は形種々に削なしていとたくみなるあり

○木盃　摸樣種々彫刻せり中にも神圖等の舊村また御幸松の古木等を以て造れる者あり好事の人愛翫すべし

○蘭　御山の深谷に生ず石蘭柔蘭片葉蘭鶯蘭岩千鳥蘭孔雀蘭等の數種あり文客盆栽にして愛すべきものなり

○岩韋　御山千仞の谷なる巖壁に産せ採る者甚危しといふ

○薯蕷　御山に産ずるもの治養に功驗ありといふ

○松露　須屋浦に産するものをよしとす

○海松貝　當島の近海に産す甘味ありていやしからず

○目張魚　革籠崎の邊に釣たるもの味ひ殊に美なり

○櫻海苔　御床浦邊より出る雅人の賞すべきものなり

○總太郎漬　糠を水に浸して魚肉貝肉等を漬たり好事の人雅味なりとて賞せり

○雪花漬　豆腐の売に魚肉貝肉菌等を漬て風味はなはだ愛すべきものなり

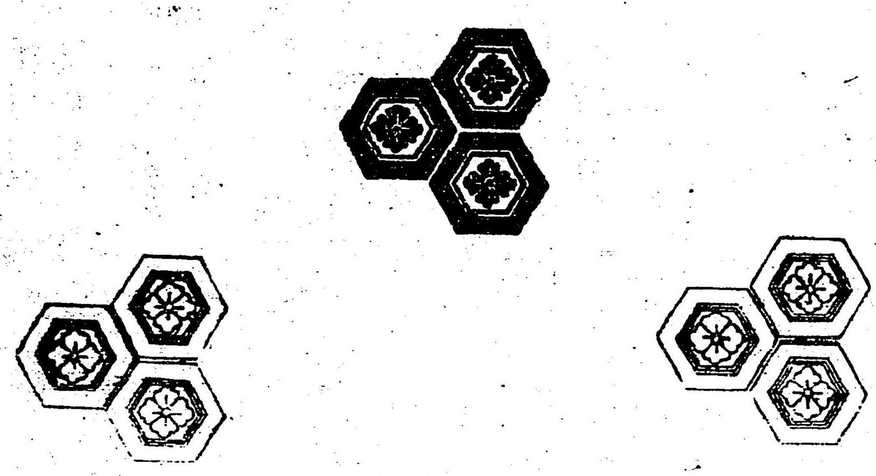
○爽櫻餅　御垣の原にて鬻ぐ上戸のしらざる味ひまた愛すべし

○木鹿　島人小川氏平字米齋といへる老人の彫刻したるもの能く真を

得たりとて世に賞せらる明治十年内國博覽會場へ出して花紋賞牌を
拜授せり
嚴島土産了

明治二十六年七月廿日再版印刷
明治二十六年八月八日發行

定價拾五錢

編輯兼發行者　島村武助　廣島縣廣島市字元柳町十一番邸
印刷者　神田友輔　廣島縣廣島市字大手町六丁目八十六番邸
印刷所　同愛新報社活版部　廣島縣廣島市字大手町七丁目八十四番邸
發賣所　廣島以文社　廣島縣廣島市字大手町一丁目三十八番邸

版權所有